

# 陶 行 知 論 爭

教育行政学研究室

溝 口 貞 彦

## The Argument about Tao Xing Zhi

Sadahiko Mizoguchi

### Contents

I Tao Xing Zhi's Career and His Educational Activities

II Look back over the Argument about Tao

1. Periods of the Argument

2. A Sort of Tao's Educational Thought

3. Tao and Dewey

III My Opinion

1. About Tao and Dewey

2. About a Sort of Tao's Educational Thought

### Summary

Tao Xing Zhi (Toh Koh Chi 1891—1946) was known as a great teacher in modern China. At first his educational thought was taken for that of the new democracy (Mao Ze Tung's thought). But in 1951—2, many took the view that it was not in agreement with the fact. They asserted in "People's Education" that Tao's thought was that of a petit bourgeois class (or of a bourgeois class).

I think Tao was "Populist (narodniki)" in China, for he had the same social qualities in Russian old Narodnike as follows. Those are (1) peasantly democracy; (2) an Utopia—he attempted to create it through his education; (3) but, by a natural process of his thought, it was to build a factory, that is, to get into a road of capitalism.

### 目 次

I 陶行知の経歴と教育活動

II 中国における陶行知論争の回顧

1. 論争の時期区分

2. 陶行知教育思想の階級的性格

3. 陶行知とデューイ

III 私の意見

1. 陶行知とデューイについて

2. 陶行知教育思想の階級的性格について

I 陶行知の経歴と教育活動

陶行知(1891—1946)は、現代中国の偉大な教育者として知られる。本稿は、彼の死後、中国で行われた陶行知教育思想についての一連の論争を紹介し、あわせてそれ

に関する私見を提示することを目的としたものである。  
そこで陶行知の経歴と教育活動については、概略をのべるにとどめる。

陶行知は、清末、日清戦争に先立つ1891年10月18日、安徽省歙県に生れた。6歳のとき父から四書五経の教育を受け、15歳のとき、歙県城内のキリスト教内地会の崇一学堂（中学）に入った。総明のため、飛び級をして、3年のところを2年で卒業。17歳のとき、杭州にて、広济医学堂で医学を学び、19歳より南京の金陵大学で文学を学んだ。

1913年（22歳）金陵大学を卒業して結婚。翌14年、アメリカに渡り、はじめイリノイ大学で都市政策を学び、のちコロンビア大学に転じ、ジョン・デューイに就いて教育学を学んだ。

1916年（25歳）帰国して以後の彼の教育活動は、次のように時期区分することができる。

第1期（1916—26年）南京高等師範の教授となり、理論活動および教育普及活動を行った時代。

第2期（1927—34年）曉莊師範・「工学団」を興し、彼の生活教育論を形成、かつ実施に移した時代。

第3期（1935—46年）日本の侵略に際し、国難教育・抗日救団教育・民族解放の教育を掲げて、社会的活動を行った時代。さらにそれらの理念を、育才学校・社会大学を設立して、継承発展させた時代。

### 第1期（1916—26年）

陶行知は16年に帰国するとすぐ、南京高等師範の教授となり、デューイの「民主主義と教育」をテキストにして、プラグマティズムの教育学を説いた。

当時彼は、「教学合一」（1919）の観点から、大学で「教授法」を「教学法」と改めるよう提案したが、受け入れられなかった。

教育および理論活動と併行して、教育上の社会活動を行った。22年「中華教育改進社」の総幹事になって、新教育の普及・宣伝につとめた。同じ頃、晏陽初らと「中華平民教育促進会」を起し、「平民千字課」を編集、平民教育運動を展開した。

それに先だつ1919年、デューイが訪出し全国的な講演旅行をしたが、それに胡適らとともに随行した。21年モンロー訪中のさいも、北京・天津等に随行した。

当時彼は農村師範学校の設立を提言しているが、その頃から既に彼の眼は平民、とくに農民に向けられていた。

### 第2期（1927—34年）

大学の教職を辞し、文字通り「在野」の教育活動を展開した時期である。

1927年3月、陶行知は南京郊外に実験的な農村師範学校をつくった。それが有名な曉莊師範である。曉莊では、伝統的な学校とは異なり、固定したカリキュラムも教室での授業もなく、生徒を生物・農芸・無線・芸術などの組にわけ、昼間は労働（農作業）、夜は自学自習を行った。それによって生活および労働に即した新しい教育を探求するとともに、旧来の「書呆子」（本の虫）をつくる教育、「偽知識」階級養成の教育を、克服しようとしたのであった。

当時彼は、「偽知識階級」「教学做合一」「在労力上劳心」などの重要な論文を次々と発表している。このとき彼の三大スローガン「生活即教育」「社会即学校」「教学做合一」が生みだされた。すなわち彼の生活教育の基礎

理論が形成された。

1930年国民党政府は、曉莊師範内の共産党員の活動を忌避して、これを閉鎖・弾圧した。陶行知は一時日本に亡命ののち、上海に帰った。彼は32年、小説「古廟敲鐘録」を発表、集団で働きつつ学ぶ「工学団」の構想をのべた。その構想を実現するため、同年彼は上海郊外に「山海工学団」を設立した。工学団は年ごとに増加・拡大していった。

このとき彼は、教師の不足を補うため、既修の生徒が未修の生徒（または成人）を教える「小先生制」を提案した。それは遅れた農業国である中国に適した方法であるとして有名になり、解放区にも伝えられ、拡まった。

### 第3期（1935—46年）

1931年日本は中国東北部を侵略・占拠した。それをきっかけに、陶行知は政治的姿勢を強め、抗日を主張し、蔣介石の不抵抗政策を批判するようになった。

35年国難教育社を起し、「国難教育方針」を起草。36年全国各界救國連合会の依託により、国民外交使節として欧米29カ国をまわり、抗日救國を説いて歩いた。33年秋帰国。

39年夏、四川省重慶近郊に「育才学校」を創立。その生徒は保育院から選び、集団生活のなかで、個性の開発・新中国創造の任い手の育成をめざした。その中から民族解放運動に参加する多くの青年が生みだされた。

しかし学校経営は困難をきわめ、41年彼は「新武訓」運動を提唱して「がんばりぬく」ことを説いた。

45年、中国民主同盟の設立に参加。

46年1月、重慶社会大学を創立（校長陶行知、副校長李公樸）。この頃から国民党のテロが激化し、李公樸・聞一多等の民主人士が相ついで暗殺された。さらに陶行知にも黒い手がのびるに及んで、同年7月25日、彼は脳溢血により、上海で急死した。ときに、55歳であった。

## II 中国における陶行知論争の回顧

### 1. 論争の時期区分

中国で、陶行知の死後から50年代にかけて行われた陶行知教育思想に関する論争には、次の3段階（3つの時期）があった。

#### 第1段階（1946—50）

陶行知を全面的に肯定、さらに尊崇し、その教育思想を新民主主義教育思想と規定する見方が支配的であった。

陶行知は政治的立場をこえて（右は軍閥馮玉祥から左

は共産党の毛沢東・周恩来にいたるまで<sup>(1)</sup> 諸階層の人々から広い尊敬を集めていた。陶行知に対する全面的肯定、さらには尊崇の念を代弁した人として、郭沫若をあげることができる。彼は

「二千年前の孔仲尼、二千年後の陶行知」

「あなたは孫中山死後の一人の孫中山」<sup>(2)</sup>

どうたった。陶行知を孔子や孫文になぞらえることは、おそらく唐突な感を与えることであろう。しかしそれは、陶行知に対する深い敬慕の念がこのような対比をなさしめたのだと考えるほかはない。

陶行知の教育思想に対する評価としては、その代表として次の陸定一のことばをあげることができる。

「教育事業において、陶行知先生は人民の力と知恵を深く信じた。そこで彼は、人民は自ら自己を解放できると考えた。彼は人民自身が自ら行う教育のみが理想の教育であると主張した。彼はこの主張のために、孜々として倦まず、一生働いた。誰か陶先生を見て、彼の堅固かつ卓絶した精神に感動しないものがあろうか。

陶先生のこのような教育思想は、まさに新民主主義の教育思想であり、まさに人民に奉仕する教育思想である。人民を喚起して自ら自己を解放することを目的とした教育である」<sup>(3)</sup>

これは陸定一が中国共産党を代表してのべた悼辞(1946)の一節であるが、それを単なる追悼のことばとみなすことはできない。上記の陸定一による規定は、中華人民共和国成立後、50年当時においても、教育行政の最高責任者であった馬叙倫によって、次のように確認されている。

「陶行知先生の歩んだ道は、すなわち新民主主義の教育思想路線であった」<sup>(4)</sup>

私たちは、第1段階(46—50)においては、陶行知の教育思想が新民主主義の教育思想であり、人民に奉仕する教育思想として、高く評価されていたことを知るのである。

## 第2段階(1951—56)

1951年、映画「武訓伝」に対する批判運動が起った<sup>(5)</sup>。それをきっかけに、現代の武訓をもって自ら任じていた陶行知に対しても、批判の刃がむけられた。51年秋から52年はじめにかけて、陶行知思想の批判、および陶行知思想に関する論争が、主に中央機関誌「人民教育」誌上で展開された。そこで陶行知思想とデューイ思想との関連、およびそれと新民主主義思想とのちがいが論究され、陶行知思想は小ブルジョア的またはブルジョア的として、批判的、さらには否定的に扱われるようにな

なった。

陶行知批判は、その後(54—55年)大規模に展開された胡適批判・プラグマティズム批判<sup>(6)</sup>の先駆をなすものである。そしてそれは、1919年デューイ訪中以来、約30年にわたって中国教育界を支配してきたプラグマティズム教育学を清算し、社会主義教育学をうちたてようとする運動の一環をなすものであった。

### 第3段階(1957年以後)

第2段階で強かったソビエト教育学(なかんずく、カイロフ「教育学」)への依存に対する反省と、旧解放区の教育経験に学ぶ運動が起ってきた。その過程で、解放区の教育に大きな影響を与えていた陶行知の教育学説の積極面を再評価する声が起ってきた。そのきっかけとなったのは、「人民教育」(57年7月号)所収、鄧初民と張宗麟の2論文である<sup>(7)</sup>。

しかし陶行知の再評価といつても、それはけっして第1段階と同じような評価に逆どりすることをいみするものではなかった。陶行知の、デューイとは異なる民族的愛国主義的精神とか、大衆に奉仕する姿勢とかが評価されても、陶行知教育思想は小ブルジョア的で、新民主主義教育思想(またはプロレタリア的教育思想)とは異なるという認識はほぼ共通していた。それは、その後「安徽史学通訊」で展開されている、陶行知に関する諸論文をみても、いえることである<sup>(8)</sup>。

第3段階では、基本的には第2段階で敷かれたレールのわく内で、一定の再評価がなされたということである。

## 2. 陶行知教育思想の階級的性格

第2段階で展開された陶行知批判論争では、主なテーマは2つあった。1つは、陶行知教育思想の階級的性格についてであり、もう1つは、陶行知思想とデューイ思想との関連についてであった。

まず、陶行知教育思想の階級的性格についていえば、戴白韜・薰純才によって「小ブルジョア的」という規定が提示され、それを潘開沛が批判して「ブルジョア的」という別の規定を提起し、さらにそれに対して張健の反批判がなされたという経過をたどっている。

### (1) 戴白韜の見解

第1段階の陶行知に対する全面的肯定から、第2段階のその批判への転換を、劇的な形で表現したのは、かつての陶行知の同志であった戴白韜であった。彼は「回憶陶行知先生」(1947)で、陶行知の教育思想は新民主主義教育思想であるとのべていたが<sup>(9)</sup>、それは誤りであった。

それは「陶行知の小ブルジョア的教育思想」と、マルクス・レーニン主義・毛沢東思想の（すなわちプロレタリア階級の）教育思想とを混同していた、と自己批判した。

では、両者はいかに区別されるのか。

戴白韜は次のように説明している。

陶行知は「反帝反封建の革命運動に参加せず、教育で社会を改造するという幻想をもっていた。彼は『百万の学校を提唱し、百万の農村を改造する』とのべていた。」「このような『新しい村』思想は、まったく一種の小ブルジョア的改良主義思想である。彼は封建制度の打倒を提起せず、社会的矛盾を教育で弥縫しようとした。それは一種の階級調和論である。」

ここで戴白韜は、毛沢東の「新民主主義論」を引用して、次のようにいいう。

「教育は政治・経済に規定される。」新教育および教育の普及は「旧政治経済制度をくつがえし、新政治経済制度を建設することによってはじめてなしとげられる。それはけっして単なる教育問題ではない」<sup>(10)</sup>

両者のちがいを、史的唯物論にもとづいて、教育（上部構造）で社会を改造しようとするか、それとも教育および社会の改革は政治経済の変革（革命）によらねばならないか、という点に求める。すなわち、階級調和か階級闘争か、改良か革命か、という点に、基本的なちがいがあるといいうのである。

## （2）薰純才の見解

薰純才（のち教育部副部長（文部省事務次官にあたる）になった人）は、ほぼ戴白韜と同じ見解である。

「半封建半植民地社会にあって、帝国主義と封建主義と官僚資本主義の反動的統治下にあって、『郷村教育』『科学教育』『普及教育』を唱え、階級闘争を避けて、教育と科学で社会を改造し、中国の農村を『西天の楽園』に変え、『工学団』によって民族の運命を救おうとしたが、あきらかにそれらはすべて改良主義思想であり、ユートピア思想である」

薰純才の一歩すんだ論点は、なぜ自分たちは陶行知の改良主義的教育思想と、毛沢東の新民主主義教育思想とを混同していたかを追求した点にある。彼はそれを、「陶先生の政治的主張と教育思想とを混同した」こと求めめる。

陶行知は初期の改良主義から進んで、晩年は革命派に属していた。他方、「彼の生活教育の理論体系は、基本的に変ることなく、旧態依然として、デューイの実用主義教育思想の本質を保持していた」

薰純才是、陶行知を「小ブルジョア革命派」と規定

し、「政治上では革命的、教育上では非革命的」という定式をうち出した<sup>(11)</sup>。

## （3）潘開沛の批判

潘開沛は、戴白韜と薰純才の規定を批判して、「陶行知の教育思想は小ブルジョア的か」と問題を投げかける。彼によれば、それは小ブルジョア的ではなく、「ブルジョア的」と規定さるべきである。というのは、

①陶行知のかかげた「郷村教育」は、自由主義ブルジョアジーのスローガンであった。

②彼の哲学は主観的観念論と素朴な唯物論（「行は知の始」）との二元論であり、結局は主観的観念論であった。

③彼の主な経済基盤は、資本家・反動政府・国民党内の反対派であった。

④小ブルジョアは機械的平等、絶対的平均主義を要求するが、陶行知にはそのような主張がない等の理由によるものであった<sup>(12)</sup>。

## （4）張健の反批判

張健は曉莊の小学や山海工学団で学んだ陶行知の弟子であるが、陶行知教育思想を「小ブルジョア的生活教育学説」<sup>(13)</sup>とする立場から、潘開沛の論拠を1つ1つ反駁して次のように述べた。

①郷村教育を一概に自由主義ブルジョア的ということはできない。共産党による人民的なもの、地主的封建的なもの（梁漱冥等）、買弁的なもの（晏陽初等）、自由主義ブルジョア的なもの（中華職業教育社）、小ブルジョア的なもの（陶行知等）があった。

②陶の哲学はたしかに主観的観念論と素朴な唯物論との二元論である。しかしそれはブルジョア的思想によるのでなく、自ら労働するが観念論の支配をうける小ブルジョアの二面性に起因するものである。

③陶の主な経済基盤は民族ブルジョアジーであったが、晩年は共産党・解放区からの援助であった。

④陶先生には極端な民主化思想がある。それは「工学団」にみられる平均主義的な民主化思想などであり、小ブルジョア的ユートピア思想にもとづくものである。

⑤さらに、ブルジョアは肉体労働と精神労働の統一、搾取反対を主張しないが、自己の労働に依存する小ブルジョアはしばしばそれを主張する。その思想こそはまさに陶行知教育思想の中心になっている<sup>(14)</sup>。

## （5）まとめと陶行知論をとりあげる意義

以上みてきたように、陶行知教育思想の階級的性格については、小ブルジョア的（すなわち農民的）か、ブル

ジョア的（民族ブルジョア的）か、という点に争点があった。そして張健の批判に対し、潘開沛の反論はついに聞くことができなかった。私のみるところ、陶行知教育思想については、「小ブルジョア的」と規定する論者が多く、それが通説となっているようである。

ところで、陶行知教育思想が小ブルジョア的と規定されようと、ブルジョア的と規定されようと、大した問題ではないと考えるむきもあるかもしれない。私が陶行知論争をとりあげるのは、次のような意図からである。

経済学には「ウクラッド」という概念があり、例えば、小ブルジョア的経済とブルジョア的経済との区別等がかなり厳密に語られている。教育学でこれに相当するものは、「教育思想の階級的性格」ではないだろうか。

しかし、何が、いかなる教育思想が、小ブルジョア的か、またはブルジョア的かについて、まだ私たちの周辺では、概念が確立していないように思われる。

中国の教育学や教育論争は、（日本のそれよりも）はるかに大きな比重をもって、というよりもむしろ、「階級性」の問題を回転軸にして、展開されている。陶行知論争についても、単に陶行知だけの問題としてではなく、より一般的に、教育思想の階級性を規定する上での、観点・論拠を学ぶ上で、大きな意義があると考える。

### 3. 陶行知とデューイ

陶行知とデューイの関連については、大きく2つの見解にわかれた。一方は、陶行知教育思想がデューイのプラグマティズム教育学にもとづく点を強調し、批判するのに対し、他方は、陶行知とデューイは基本的に区別されなければならないと主張するものであった。前者の中でも、戴白韜・薰純才是、陶行知教育思想はデューイの翻案として、同一性の契機を重視するのに対し、潘開沛は、陶行知はデューイ思想を中国の状況に適用させるべく発展させたと、発展的契機を重視していた。それに対して後者（区別論）から、具体的には、薰純才に対して張凌光から、また潘開沛に対して樂喜から、批判がなされるという経過をたどった。

#### （1）戴白韜の見解

「陶先生の教育思想は、たしかにデューイの思想に淵源しており、基本的にはデューイの思想である。」

陶行知はデューイの「教育即生活」「学校即社会」を転倒して、「生活即教育」「社会即学校」というスローガンを提起した。しかしそれはデューイの経験主義的生活教育のわくを出るものではなかった。

また、彼はデューイにならって、「做」（=作=do）

を強調した。

それは「系統的な理論・知識の教室での教学を放棄し、教師の指導的役割を否定したが、……それはまさにデューイの反動的教育思想の中国での再版にほかならない」<sup>(15)</sup>

#### （2）薰純才の見解

「陶先生の提起した『生活即教育』、『社会即学校』、『教学做合一』といふ一連の生活教育理論は、すなわち彼の師デューイの『教育即生活』、『学校即社会』、『行動の中で学習する』（原文「在做上学」，“learning by doing” の訳）という実用主義教育理論の翻案である、

陶先生は『生活教育とは、生活が本来有し、生活が自ら営み、生活が必ず求めるところの教育である』<sup>(16)</sup>（Life education means an education of life, by life and for life）という。これもデューイの経験の教育の定義『経験が本来有し、経験が自ら営み、経験が必ず求めるところの教育』（an education of experience, by experience and for experience）<sup>(17)</sup>を踏襲したものである」

「総じていえば、生活教育の理論と実践の基本的特徴は、（1）「実際の生活」を中心とし、教室での教学を否定すること、（2）「共教、共学、共做」を過度に強調し、教師の役割を低めること、（3）生徒の個人的な生活経験を第一位におき、理論・知識を軽視することである。……これらはデューイの実用主義教育と同じ轍をふむものである」<sup>(18)</sup>

以上のように、戴白韜および薰純才是、陶行知教育思想のうちに、デューイ教育思想をみ、さらにそのなかにブルジョア教育思想の諸原則をみいだす。彼らがブルジョア教育思想の原則と考えるのは、児童中心主義と生活教育論であり、簡単にいえば、「教育しないことが教育である」という教育の放棄をみちびく理論である。それを批判・克服して、社会主義の諸原則を系統的に教授する教育理論を確立しようとするのである。

#### （3）張凌光の薰純才批判

中国の著名な教育学者である張凌光は、直接には薰純才を対象とし、陶行知の生活教育理論はデューイの翻案であるという見解を批判して、次のようにいいう。

「中国の小ブルジョア階級の進歩分子である陶先生の思想と、アメリカのブルジョア階級デューイの思想とはっきり区別しなければならない」

といふのは、「デューイの『教育即生活、学校即社会』は、教育がアメリカ資本主義社会の生活に、いっそうよく適合し、学校内の教育内容が直接的に、資本主義社会の実用に適合するよう要求したものである」

陶行知は「半封建・半植民地であった旧中国」で、教

育で社会を改造しようとして活動したが、「旧中国の学校教育と社会生活との間の矛盾は非常に大きかった。」そこで陶行知の改良主義的な教育事業はたえず失敗した。ついに抗戦前後から「教育は民族解放・大衆解放の一種の闘争の武器である」と認めるようになり、共産党に接近していっしょに活動するようになった。すなわち改良から革命へと転化した。

このように、陶行知とデューイとは社会的背景が異なる。また、2人の主觀・意識も、(資本主義への奉仕と、半封建・半植民地社会における大衆への奉仕という点で)異なる。だから「彼らの教育思想もまた異なる」というのであった<sup>(19)</sup>。

#### (4) 潘開沛の見解

張凌光とは別の形で、戴白韜・薰純才を批判し、1つの問題提起をしたのは、潘開沛であった。彼はいう。戴白韜・薰純才はいずれも、陶行知思想はデューイの翻案だと述べている。しかし、陶行知教育学はデューイ学説の単なる中国版にすぎないのだろうか。

潘開沛によれば、「デューイ教育学は、アメリカでは支配階級に直接奉仕するものである」、そして中国でも自由主義ブルジョアジーの要求に応えるものである。しかし自由主義ブルジョアジーが官僚・買弁ブルジョアジーに抑圧されて伸びなやんでいたのと同様に、陶行知の新教育も旧教育のカベにぶつかった。「陶先生は直接デューイ学説を運搬して、中国の旧教育を改造しようとしたが(1921年前後)、旧教育の種々な抵抗にあった。

(南京高師で教授法を教学法と改めようとしたときに困難にぶつかったように)」

彼は目を学校外に転じ、「デューイの学説によって、都市の平民と農村の農民に奉仕しようとした。」「それは資本主義的生産を発展させるという要求に応える」ものであった。しかし学校内で教育権の奪取にむかわづ、学校外で「旧政治・旧経済の支配下で」教育運動を行おうとしたところに、彼の改良主義がある。

半植民地・半封建社会である中国では、学校はすでに官僚・買弁ブルジョアジーの手に握られていたため、デューイのいう「教育即生活」「学校即社会」のスローガンがそのままでは使えない。そこでそれを「生活即教育」「社会即学校」として、大衆教育にあうように変えたのであった。

潘開沛は次のように結論する。

「だから陶先生の提起した『生活即教育』、『社会即学校』、『教学做合一』、これらの生活教育理論は、デューイ学説の単なる翻案ではなくて、デューイ学説の半植民地・半封建社会における具体的な適用であり、新しい發

展である」<sup>(20)</sup>

なぜ陶行知がデューイの「教育即生活」「学校即社会」を転倒して「生活即教育」「社会即学校」としたかについての潘開沛の説明は、注目すべき卓見であると私は考える。

#### (5) 樂喜の潘開沛批判

樂喜は潘開沛を批判して、次のようにいう。潘開沛が薰純才の翻案説を一步すすめて発展説をとるのは、「陶行知先生の中国教育史上における地位と役割を徹底的に全面否定したもの」である。しかし「陶行知の学説はデューイに起源をもつが、デューイとは異なる。」

樂喜は次の点に両者の「本質的な区別」があるといふ。

①社会的背景が異なる。デューイ説は帝国主義のアメリカ社会において成長したが、陶行知説は半封建半植民地の中国社会で生れた。

②立場が異なる。デューイはアメリカの独占資本を代表する。陶行知は中国の小ブルジョア階級を代表するが、民族独立のために闘った戦士である。前者は反動派、後者は革命派に属する。

③教育の内容が異なる。デューイの教育内容は資本家に役だつ一般事務の知識・技能である。陶行知の方は、民族的・科学的・大衆的な教育である。

④教育の作用・結果が異なる。デューイが養成したのは、近視眼的にアメリカの生活に順応しようとあくせくする人たちである。それに対して、陶行知が養成したのは、民族独立の遠大な理想のために奮闘する英雄的気概をもった人たちであった。

樂喜は潘開沛の所説を陶行知に対する汚辱とみなし、陶行知を偉大な人民教育家として位置づけるよう呼びかけるのである<sup>(21)</sup>。

#### (6) その他の見解

陶行知の教育思想がデューイにもとづくことは、一般に認められている。しかしその歴史的・社会的意義・役割からみて、両者は基本的に区別さるべきだという意見の方がが多い。

両者の生き方もしばしば対比される。例えば、張宗麟は、「デューイは帝国主義に奉仕した御用学者である。」「陶行知はこれに反する。彼は帝国主義に反対した勇者であり、一生中国の独立、自由、民主を求めて奮闘した。……そのためついにファシスト反動派の迫害を受け死去した。どうしてこのような陶行知がアメリカのデューイの中国における翻案だといえようか」という<sup>(22)</sup>。

両者の教育思想の歴史的・社会的意義・役割のちがい、さらには両者の生き方のちがいまで含めて合理的に説明

されなければ、単にデューイの翻案・再版というだけでは、大方の納得はえられないようである。

### III 私の意見

#### 1. 陶行知とデューイについて

陶行知論争では、陶行知とデューイが基本的に同じ教育思想であったと説く人も、両者は基本的に異なると説く人も、共通の前提があった。それはデューイの教育思想をアメリカ帝国主義の思想とみることであった。そこから「基本的同一」を説くことは、ただちに陶行知の否定面を批判することにつながった。陶行知の積極面を評価する人は、「基本的に異なる」と立論した。しかし私は両者の前提（デューイ思想の評価）に疑問をもつ。

たしかにデューイは「学校と社会」で述べているように、教育を工業化された社会、すなわち資本主義社会に適合させることを目的にした。それは資本主義の教育思想ないしは帝国主義の教育思想と呼ばれてしかるべきものであった。

しかし先進国と後進国との思想上の接触は、しばしば後進国に対して1つの革命的役割を果す。資本主義下のアメリカにおいては、進歩的意義を失っていたデューイの教育思想も、半封建の中国においては、進歩的役割を果した。（五四時期に訪中したデューイの教育思想は、当時「デモクラシー アンド サイエンス」の思想として歓迎された）。

そうだとするならば、翻案・発展説に対しても、新たな光があてられなければならないであろう。陶行知がデューイ教育思想を継承・発展させたことも、樂喜のいうように陶行知を「全面否定」することではなく、かえって陶行知の苦闘を積極的に評価することになるであろう。それが第1点である。

私は基本的には継承・発展説にたつのであるが、戴白韜や薰純才の行った陶行知批判は一面的であるといわざるをえない。彼らは陶行知の「生活即教育」「社会即学校」の理論からは、学校教育の否定、教師の役割の軽視が導かれるという。形式的にみれば、そういうこともできよう。しかし実態はどうであったのか。陶行知は本当に教育と学校の解消を考えていたのだろうか。けっしてそうではなかった。

彼は教育と学校に大きな力をみ、自ら曉莊師範や育才学校・社会大学を次々とつくりだした。教育と学校は、農村改造、ひいては全中国改造の武器になると考えていた。「農村学校は、農村生活を改造する中心とならなければならない。農村学校は今日の中国で農村生活を改造

する唯一可能な中心である」<sup>(23)</sup>

そして教師をその前衛として位置づけていた。陶行知の生活教育論は、アメリカ的な、すなわち都市的消費的遊戯ないし工作的なものではなく、中国的な、すなわち農村的生産的労働的なものへ、積極的なたくましいものへとつくりかえられていた。陶行知の生活教育論を全体的にみるならば、いちがいに学校教育の否定、教師の役割の軽視というようにいうことはできないであろう。それが第2点である。

発展説にたつとしても、潘開沛の民族ブルジョアジー説は不正確である。それでは半封建的半植民地的状況への適応だけが語られ、陶行知が意図し実践した半封建的半植民地的状況の克服という契機が出てこない。

陶行知教育思想には、五四以後の農民の革命的高揚が反映している。それは独特的救国思想となつて表われる。彼の教育思想の基底にあるのは、中国が危機的状況にあるという認識と中国を救わなければならないという意欲である。

「中国はすでに生死関頭にあり、……大衆の解放をなしとげるためには、必ず中華民族の解放をなしとげなければならない。中華民族の解放をなしとげるためには、必ず教育によって大衆を連合し、國難を解決しなければならない」<sup>(24)</sup>

陶行知が単にデューイの教育思想を継承したに止まらず、それをきわめて積極的戦闘的なものにつくりかえ、それを力強く農村において実践していったのは、まさに彼のこの救国思想にもとづいてであったと私は考える。それが第3点である。

私は以上の3点から、戴白韜・薰純才や潘開沛等とは異なるいみで、すなわち進歩的ないみにおいて、陶行知のデューイ思想継承・発展説をとりたい、またとるべき、と考える。

#### 2. 陶行知教育思想の階級的性格

陶行知の教育思想については、すでに多くの人が論じてきた。それはあるいは新民主主義的教育思想といわれ、またあるいは小ブルジョア的、あるいはブルジョア的教育思想といわれてきた。そして大かたはこれを小ブルジョア的教育思想とみているようである。

私は、陶行知の教育思想を明確に特徴づけるためには、これを「ナロードニキ主義」の教育思想というのが、最もふさわしいと考える。

これについて示唆を与えるのは、王泰然の論文である。「陶行知は知識分子によって農民を指導し、社会を改造するという空想と、『大同社会』という夢想をいたい

ていた。それらの特徴は、人民主義的色彩を表現している。しかし、彼と十月革命前のロシアの急進的人民派（ナロードニキ）とも異なるところがある。ロシアの急進的人民派は恐怖手段を用いてツァー政権を覆えそうとした。陶先生は教育を手段として、社会と政治・経済の改良をはかったのである」<sup>(25)</sup>

王泰然がナロードニキに言及しているのはこれだけであるが、彼が陶とナロードニキのちがいを認めつつも、陶に人民主義的色彩を認めていたことは明らかである。

（ただし、ナロードニキをいちがいに恐怖手段をとるテロリストとみることは当らない。ヴェーラ・フィグネルの自伝によれば、ナロードニキには教育・宣伝を重視する者と一揆主義者との二派があった。前者は初期1870年代にはむしろ優勢であり、その代表はチャイコフスキイ団であった。）

中国においても、1920年前後の初期マルキストは「人民主義的性格」を帯びていたことが指摘されている<sup>(26)</sup>。李大釗等はそれを克服してマルクス主義に進むのであるが、陶行知には晩年まで長く人民主義的性格が残存していた。

では、「人民主義（ナロードニキ主義）的性格」とは何か。

レーニンによれば、それはまず第一に「農民的民主主義」である。「農民的民主主義これがナロードニキ主義のただ1つの現実的内容であり、その社会的意義である」（レーニン「ナロードニキ主義について」）<sup>(27)</sup>。

第二の特徴は、その幻想的ないし夢想的性格である。ナロードニキはしばしば空想的社会主义と結びつき、一挙に理想社会を実現しうるとする。（レーニンはそれを「ナロードニキ的ユートピア」と呼ぶ）<sup>(28)</sup>。

第三には、ナロードニキの階級的基盤は小生産者であり、ブルジョアジーに転化していく志向と必然性をもっていたことが指摘される。（レーニンは「ナロードニキを一皮むけば、ブルジョアがあらわれる」という）。

私はナロードニキ的性格を以上の点に求めるのであるが、それを具体的に、陶行知について検討してみることにしよう。

①私たちは、陶行知が「人民至上」をかかげたこと、そこでいう人民とは農民大衆であったことを知っている。

「我々農村教育に従事する同志は、われわれの心全体を三億四千万農民にささげる。われわれの心を農民の甘苦でみたそう」<sup>(29)</sup>

それが彼の信条であった。私たちは彼の思想と教育内容が強い農民色にそまっているのを見る。

陶行知はかつて生活教育を「生活の、生活による、生活のための教育」と規定した。彼が最後に到達した民主教育も同じ基調で語られている。

「民主教育とは、人を主人とさせることであり、人を国家の主人とし、世界の主人とさせることである。リンクーン大統領のことばを引延して教育の面にあてはめていえば、『民主教育とは、人民の、人民による、人民のための教育である』（『民主教育是民有、民治、民享之教育』）」<sup>(30)</sup>

陶行知の思想をリードしているのが、一貫してアメリカ的民主主義であったことがわかる。彼はそれを中国の農村で、農民を主人公として実現しようとした。その教育は「農民の、農民による、農民のための教育」であったといえよう。そこに彼の「農民的民主主義者」、すなわちナロードニキとしての本領をみることができる。

②陶行知が「烏托邦（ユートピア）思想」を抱いていたことは、すでに指摘されているところである<sup>(31)</sup>。

ここでは彼のユートピア思想がいかにして発生したかを追求してみたい。

先に陶行知の危機意識と救国思想について指摘したが、彼は中国の危機と旧教育の危機（教育の階級的独占）とを二重写しにみていた。彼には、権力と財力ばかりでなく、教育をも独占している旧来の支配者=知識人（中国を封建的状態におとしとどめ、列強の侵略をこうむる悲惨な状態におとしめたところの）に対する、激しい憎悪と軽蔑がある。（陶は彼らを「偽知識階級」と告発する）。同時に、抑圧・搾取され、さらに教育・文化からも疎外され、文盲の状態におかれている農民大衆に対する心の底からの同情がある。

中国の危機と教育の階級的独占——それを打破するため、教育を普及すること、そこに陶行知は中国の救いと、自己の「天職」をみいだした<sup>(32)</sup>。

陶行知は中国の救済を教育に求め、新教育思想をアメリカから借用してきた。しかし欧米ではすでに資本主義の矛盾が露呈し、それに代るべき社会主義が登場していた。そこから陶行知等、戦闘的民主主義者には、社会主義に対する共鳴が生れてくる。（陶行知「蘇聯憲法草案之公民権」参照）。

彼は教育によって中国を救うのみならず、一挙に「無階級社会」（大同社会）を実現しようとした。陶行知によれば、「二元論哲学は、力を労する者と心を労する者との2つの階級に分ける。」一元論哲学である「在労力上労心」（肉体労働と精神労働の結合、具体的には農業労働と教育との結合）の教育によって、肉体労働と精神労働の分裂を止揚し、階級分裂を止揚することができ

る。

「ただ『在労力上労心』の教育を貫徹することによって、はじめて『在労力上労心』の人間をつくりだすことができる。そして『在労力上労心の』人間だけがはじめて自然の勢力(energy)を征服し、大同社会(無階級社会)を創造することができる」<sup>(33)</sup>

これがユートピア思想であることはいうまでもないが、そのユートピア思想のうちに、ナロードニキと共通する1つの信念を見る。かつてゲルシェンが述べ、その後ナロードニキに共通する信念となったテーゼは、次のように要約できる。ヨーロッパの資本主義は悪であり、ロシアはそれを避けなければならない。ロシアは農村共同体ミールに依拠して、資本主義を経ることなく、社会主义に移行することができる<sup>(34)</sup>。

陶行知はミールの代りに「在労力上労心の教育」をもってきた。教育によって、階級分裂を止揚し、一挙に大同社会を実現しようとする陶行知の発想は、まさに「ナロードニキ的ユートピア」であったといわなければならない。

③陶行知は、教育による大同社会の形成を次のように描きだす。

「生きた農村教育は、人々に利を生じさせるものである。それは荒山を成林にし、瘠地に五穀を長じさせる。それは農民を自立・自治・自衛させる。それは農村を西天の楽園に変え、農民をすべて快楽の仙人にかえる。」そうすれば「村政も村民の自有・自治・自享の活動」になる<sup>(35)</sup>。それこそはリンカーンのべた民主政治が農村で実現された姿であり、大同社会の実現された姿である。

彼のめざすのは独立自営の村づくりであり、その基礎にあるのは独立自営の農民である。

陶はいう。「いわゆる眞の農人は、自ら手を動かし、地に種をまき、飯をくらう人のことである。」「自分の飯をくらい、自分の汗をながし、自分ることは自分でする……、これこそは好漢ではないか。」これが彼のいう「在労力上労心」であるが、これこそは典型的な自営農・中農の生活である。(そして貧農・雇農を没却したと批判されたところのものである)<sup>(36)</sup>。

私たちは、陶行知の階級的基盤が(ナロードニキと同じく)独立自営の農民であることを確認する。

そしてそれは必然的にブルジョアに転化していくものである。ここにおいて私たちは、陶行知が資本主義をさけて、ただちに理想の大同社会(無階級社会)に入ろうと目ざしたにもかかわらず、彼の主張を実際に行えば、農業における資本主義の発達をもたらすものであるとい

う、歴史の皮肉(あるいは弁証法)を指摘しなければならない。

も一度彼の主張を整理すると、彼は、農村→教育→自然の征服(農業生産力の発展)→大同社会の形成、とのべていた。彼が直接目ざしたのは、自然(荒山や瘠地)の征服であり、農業生産力の発展である。しかしそのためには「一に創業の決心がいる。二に工作の技術がなければならない。三に使用できる原料がいる。四に労働力がいる。五に資本がいる。」<sup>(37)</sup>これはまさに農村に資本主義を導入し、農村を工場に転化することをめざすものである。

彼の学校もまた究極は工場にいきつく。「学校を停止し、工場にかえよ」<sup>(38)</sup>

彼のいう「大同社会」の実体はけっして社会主義的無階級社会ではなかった。(彼は封建的身分制だけを階級制と考えていた)。それはブルジョア的民主社会のことであり、具体的には資本制の工場のことであった。

彼は社会主義に共鳴していたが、けっして社会主義者ではなかった。彼の進歩的意義も、封建的旧教育に対する近代ブルジョア的新教育の普及・推進という点でいえることであった。

以上が、陶行知の階級的性格を規定するにあたって、「ナロードニキ陶行知」と呼ぶゆえんである。

(指導教官 持田栄一)

## [注]

- (1) 齋藤秋男「評伝陶行知」(勁草書房, 1968)
- (2) 郭沫若「祭陶行知先生詩」、陶行知先生記念委員会編「陶行知先生記念集」(中国全国各大書店) 所収
- (3) 陸定一「悼人民教育家陶行知先生」、生活教育社編「陶行知先生四週年祭」(新北京出版社, 1950) 所収
- (4) 「人民教育」(50年8月)
- (5) 武訓は清末、貧苦のなかから農民学校を起したといわれる二宮尊徳のような人物。「武訓伝」批判から陶行知批判への展開を示す注目すべき論文は、錢俊瑞「從討論武訓問題我們學到了什么」(「人民教育」51年9月)。
- (6) 「胡適思想批判」8集(三聯書店, 1955—56)参照。
- (7) 鄧初民「我們必須對陶行知先生給以重新評価」(「人民教育」57年7月)張宗麟「閔于陶行知先生」(同上)
- (8) 方与闇「陶行知の教育事業と教育思想」(「安徽史学通訊」58年第一期), 戴白韜「論陶行知先生の生産教育」(同58年第六期), 趙文衡「陶行知先生の政治理想と學術思想」(同59年第一期), など。
- (9) 「陶氏の生活教育と新民主主義教育との基本精神は大同小異である。そこで我々は、新民主主義教育思想は毛沢東同志と陶氏が共同で創造したものだといふことができる。これは陶氏の教育学がなぜ解放区のいたるところで人民から歓迎されたかの眞の理由を説明するものである」(戴白韜「回憶陶行知先生」(光華書店, 1947))
- (10) 戴白韜「對陶行知先生教育思想認識的初步検討」(「人

民教育」51年10月)

- (11) 董純才「我對陶行知先生及其生活教育的認識」(「人民教育」51年10月)
- (12) 潘開沛「陶行知教育思想中幾個問題的商榷」(「人民教育」51年11月)
- (13) 張健「重認識陶行知先生的生平和事業」(「人民教育」51年11月)
- (14) 張健「略談陶行知教育思想的階級性」(「人民教育」52年3月)
- (15) 戴白韜, 前出。
- (16) 「生活教育是生活所原有, 生活所自營, 生活所必須的教育」(陶行知「什么是生活教育」)
- (17) Dewey "Experience and Education".
- (18) 董純才, 前出。
- (19) 張凌光「評“生活即教育, 社會即學校”」(「人民教育」52年1月)
- (20) 潘開沛, 前出。
- (21) 楽喜「試談陶行知先生的評價問題」(「安徽史學通訊」58年第一期)
- (22) 張宗麟, 前出。
- (23) 陶行知「中國鄉村教育之根本問題」

- (24) 陶行知「生活教育之特質」, 方与敵編「陶行知教育論文選輯」(三聯書店, 1950) 所収。他の陶行知からの引用も, 同「選輯」による。
- (25) 玉泰然「關於陶行知先生以教育改良社會的思想」(「人民教育」52年3月)
- (26) メイスナー「中國マルクス主義の源流」(丸山・上野訳, 平凡社)
- (27) 「レーニン全集」18巻所収。
- (28) 「二つのユートピア」, 「レーニン全集」18巻所収。
- (29) 陶行知「我們的信條」
- (30) 陶行知「民主教育」
- (31) 戴白韜, 董純才の前出論文。
- (32) 陶行知「生活教育之特質」
- (33) 陶行知「在勞力上勞心」
- (34) ゲルチエン「ロシアにおける革命思想の發達について」(岩波文庫)
- (35) 陶行知「中國鄉村教育之根本改造」
- (36) 張凌光, 前出。
- (37) 陶行知「古廟敲鐘錄」, 引用は林木「評“古廟敲鐘錄”」に負う。
- (38) 同上。